

レポート 水俣調査全体について

長崎県佐世保市 中尾 大樹

水俣における悲しみの希望への転換 その狭間に見たもの

僕は、この研修プログラムの応募用紙に、「行政のやれること、やるべきことの限界を知りたい」と書いた。

水俣で目にしたことを端的に言えば、「悲しみの希望への転換」だった。

この水俣での調査に関して、僕は、義務教育で習った知識と付け焼き刃の事前学習のみで臨んだ。そして、初日、杉本肇さんによるご自身の家族として、そして当時、幼い子どもだった立場から見た水俣病とその患者、そして地域が形を変えてしまった回想談で僕は参ってしまった。それまで仲間だった地域の人々との断絶、そしていつか家族と引き裂かれるのではないかという恐れ、大人にも本音をぶつけられない状況がリアルに響いてくる、杉本さんがその日の少年に見えた。話を聞いていた誰もが胸がえぐれるような思いで聞いていたはずだ。

でも、僕は、実のところ、この話単体より、その前に食べた杉本さんが作ってくれたしらす丼のとびきりのうまさ、翌日の懇親会で大爆笑をさらった杉本兄弟率いるやうちブラザーズの馬鹿馬鹿しさと併せて回想したとき生まれる、そのすさまじいギャップに対し、なんとも表現し難い、頭を揺さぶられるような気持ちを抱えることになった。

企業城下町として戦後の経済成長にひた走る一方で、海があり山があり豊かな暮らしがあった水俣を、吉本哲郎さんや、吉井正澄さんは「日本の縮図」そして「小さな地球」と呼んだ。環境問題で苦しんだ町が環境で再生するという価値の大転換の基礎になった美しい言葉だと思う。でも、バスから見た水俣再生のために埋め立てられたかつての水際には「港町」というバス停が佇んでいた。吉本さんは「面白くやれ」と言った。資料館で、母の水俣病を代わりに背負って生まれ「宝子」と呼ばれ亡くなった女の子は僕を見ていた。杉本さんは原因企業に就職が決まって喜ぶ人に微笑んだ。水俣に出会ったみんなは笑っていた。なんなんだこれは。

僕はここに、この地域に全く関係のない部外者として立っており、にもかかわらず、おこがましくも「生きる」力、いろんなことを畏れずに言えば、いかなる悲しみの前でも希望を見いださずにはいられない人間の「生への欲望」の強さを感じずにはいられなかった。

たぶん水俣はまだ解決していないし、することはないのかもしれない。でもここに希望とともに生きる決意をした人々がいる。そして、人々に生を吹き込むお手伝いをする事、これはまぎれもなく行政が取り組むべき仕事でもあったと思う。